

〈提言3〉は、『原文の〈提言2〉』と同じ趣旨なので全略致しました。  
ご参考になれば幸いです。

〈提言1〉子供が大人になる過程で、できるだけ「世間を知る」機会を与える。

かつては、普通に暮らしていればさまざまな世代、職業の人々が身近にいて、世間の実状を知ることができたが、今は世代間の交流が希薄なばかりか、人口の90%近くが給与生活者として職場に閉じこもっているため、異なった職業の人と接触する機会もきわめて少ない。そのため、子供のうちから高齢者と交流する機会を与えて、人が老いるとはどういうことかを自然に知らせ、また、社会人の話を聞いたり興味のある職業の現場を見学する機会を与えて、これから出て行く世間の実状をできるだけ具体的に知らせれば、職業生活への移行もより円滑に進むはずである。地域でのスポーツなども年代をこえて楽しめるようにする。

〈提言2〉 職業人となってからは、できるだけ「自分を知り」、第一線を退いてからは、できるだけ「世間に出られる」環境を整備する。

働き始めると、自分の従事する職業のために時間と労力がかかるので、自分自身のことを考える余裕が少なくなる。「人生85年時代」ではマラソン型の職業人生を送らなくてはならないため、職業キャリアの節目での長期休暇制度を普及・定着させることで、心身の充電や自省、職業生活の方向転換のための能力開発等を行いやすくするべきである。

また、今後は、停年退職後も完全に仕事から離れない人が増えるだろうが、現役時代よりは時間的にも精神的にも余裕ができるから、なるべく「世間」へ出て世代間及び地域社会の人々との交流を増やして「新たなご近所システム」を構築できるようにする。これは〈提言1〉の一部でもあり、そのために必要な「パブリックとプライベートの中間領域」を広げるための方法は今後の研究課題である。

〈提言3〉 そして、人生の最終章はできるだけ「自宅で迎えられる」ように、制度、技術を整備する。

石川英輔

※ 事務局注

『原文の〈提言2〉』は、第6回懇談会資料の〈提言2〉になります。(以下参照)

〈提言2〉

かけがえのない人生の最終章を一人一人が希望する形で全うすることができるよう、社会保障制度の整備を進めるとともに、児童・生徒から社会人に至るまでのできるだけ多くの人達が、老いや病を抱えて生きる人々のケアにボランティアとして参加する「死を学びよく生きるカリキュラム」を生涯教育の一つの柱として位置づけ、学校教育や企業の社会貢献プログラムに組み込むべきである。

こうした取組が進めば、多くの人々にとって、命の有限性や生きることの大切さを学び、最期を支え合う他者との関係性の重要性に気づき、自分なりの死生観に支えられた「人生85年時代」にふさわしい尊厳ある人生設計を打ち立てていくことが可能になる。